

分科会①

「関西圏における障害学生支援のこれまでと現在地
—地域とつながる・地域でつながる—」

コーディネーター | 藤原隆宏（関西大学）

話題提供者 | 土橋恵美子（同志社大学）
吉澤明日香（京都大学）

要旨

障害学生支援においては、個々の高等教育機関が、いま目の前に存在する学生の合理的配慮を提供するため、会話を重ね支援を行っておられることでしょう。一方で、学内に支援体制を整備していくことや、個別対応の事例など、他の大学が有する経験や知識を共有することで、一定の水準を維持し、適切な障害学生支援を提供できるという側面があります。また、近年では大学内の資源だけでなく、地域の資源を活用する機会も増えたのではないのでしょうか。今回、関西大学で全国大会が開催されるこの機に、障害学生支援の歴史を振り返りつつ、大学間のネットワークおよび地域資源との連携について、「関西」という地域をモデルにして語り合います。いわば、「つながり」をテーマにした分科会です。

コーディネーターによる当日の様子や感想等

本分科会では、2名の話題提供者から報告をいただきました。土橋さんからは「関西障がい学生支援担当者懇談会（KSSK）」を中心に支援者のネットワークについて、また吉澤さんからは就労をはじめとする地域資源と高等教育機関との有機的なつながりについて、それぞれ話題提供いただきました。オンラインで参加者からの質問を受け付けましたが、どれも現場で支援に従事する誰もが経験するような質問や意見が多かったように思います。「関西だからできる」ではなく、エッセンスを持ち帰っていただいて、それぞれの地域で生かしてもらえたらと願っています。

また、話題提供者からは、それぞれの「自分史」を語っていただきました。障害学生支援が構築されてきた背景には、そこに従事してきた支援者の人生とも無関係ではないことを伺い知ることができました。

いま、私たちがいる障害学生支援の「現在地」は、通過点のひとつにすぎません。個々

の支援者の悩みや課題を「われわれの課題」として受け止め、個々の経験を「われわれの経験」として共有し、互いに高めあっていくことが障害学生支援を充実・発展させていくことにつながる。また障害学生支援の成果や課題を地域のネットワークと交流させることで、今日的な課題を制度・政策上の課題として明らかにさせること。そんなことの大事さを考えさせられた分科会でした。